

編集後記

▽『論究日本文学』60号をお届けします。いわば還暦を迎えることになった本号は院生二篇、会員二篇、専任教員一篇の論考に、書評二篇という内訳になりました。いずれも意欲的な研究・実践成果として、評価されるものと思われず。

▽本年度は、立命館大学日本文学会は創立四十周年の年にあたります。続けてまいりました、募金活動も、皆様の御協力により、いよいよ目標額にあと一步というところになってまいりました。同封の趣意書を御覧の上、なにとぞ協力下さいますようお願いいたします。

▽本誌は、年一回の大会、国語教育ゼミナール、年四回催される日本文学談話会などで発表された研究成果や大学院生の修士論文などの他、広く会員の研究活動、教育実践活動の成果を掲載する場です。十分な資料の検討と緻密な調査を踏まえた力作、斬新な発想に基づいた実践成果の報告を奮ってお寄せ下さい。

▽投稿原稿は四百字詰原稿用紙三十枚以内を原則とします。本誌は年二回、六月と十二月の刊行となりますが、締切はそれぞれ三月十五日、九月十五日です。送付先は「立命館大学日本文学会総務」まで。なお、採否は、編集委員会が決定致します。

▽投稿原稿の末尾に、ひらがなの姓名、所属を括弧でくくって付して下さい(バックナンバー参照のこと)。ワープロ原稿の場合は、29文字×23行で印字して下さい。(編集委員会)

一九九四年五月十日印刷
一九九四年五月十五日発行

論究日本文学 第六十号

編集兼 立命館大学日本文学会
発行者 伴 利昭

印刷所 京都市上京区
上長者町黒門東入
西村印刷株式会社

発行所 京都市北区等持院
北町五六の一
立命館大学日本文学会

本会への入会申込・会費の払込はすべて左記へお願い致します。なお、領収証は振替払込票をもって、これに代えさせて頂きます。

会費 三〇〇〇円(卒業生・大学院生)
二〇〇〇円(学部学生)

〒603 京都市北区等持院北町五六の一
立命館大学文学部内
立命館大学日本文学会
振替 〇〇〇一五―三八八三番

立命館大学

日本文学会

ニュース
No. 38

「論究日本文学」第60号 付録 1994. 5

近時 往 来

セメスター制度はじまる

一九九三年度

会長 伴 利昭

今年度よりセメスター制度が実施された。今まで通年4単位の課目のあらかたが、前後期に分割され、2単位ずつで独立する。当然のこと、前後期それぞれに評価が必要となるから、試験期間も設定されることになるし、学年暦も今までと違った様相をみせてくる。今年、在学生の履習ガイダンスは3月30日に始まった。新入生の入学式は4月1日だ。3月に新学期行事が始まるなんて、今までの感覚ではとまどうばかりだ。こういう日程でないとして7月中に試験を終えられないし、評価も出ない。単に早く始まっただけでなく、一斉に効率的なスケジュールに乗せられて、身動きできない思いをすることもある。しかし、このことで外国の9月新学期の学制にも対応できる素

地ができたわけで、国際化時代の教育学改革という一面もある。半年ごとの成績評価で学生の学習計画を立てやすい、刺激にもなるという。学生の為には、なるほどそうかもしれない。年間の講義スケジュールの内容をあらかじめきちんと提示するシラバスなるものも学部によって採られはじめている。現代に即応する大学の変革のスタイルということで、特別に異を唱えるつもりはないが、それでも何か置き忘れたようで落ち着かない。

ふと昔の、五月連休明けにしか講義を始められなかった先生のことだとか、「今日の講義はまとまりきらないので中止する」と宣言して退室される先生のことだとかが思い出される。感心できる姿ではないが、しかし、怠け者の先生だったわけではない。むしろ、尊敬を一身に集められる大学者だったし、最新・最先端の研究が講じられているという学

生の信頼と充足感があった。徒然草に伝える盛親僧都という智者は、みめよく、力強く、大食にて、能書・学匠・弁説、人にすぐれて宗派の重鎮であったが、世間を何とも思わぬ変り者で、よろず自由にして大方人に従うということなしという。ありきたりの約束事や形式には頓着しない世の常ならぬさまであったが、人に厭われず、よろず許されたという。これを「徳の至れりけるにや」と兼好は評している。

社会の変化や時代の要請を受けて、大学も変わりつつある。新しい工夫や形もどんどん採り入れられている。しかし一方で、変らぬ大事がある。